

新しい都市型高齢社会における  
地域と大学の統合知の拠点

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」平成25年度採択

杏林大学  
COC事業  
最終報告書

[平成25年度～29年度]



# Contents

- 03 | ごあいさつ
- 04 | 杏林大学COC事業概要
- 06 | 5年間のあゆみ
- 10 | 教育の地域志向化に向けた取り組み
- 14 | 杏林CCRC研究所をおとした知の創造・知の提供
- 18 | 地域における社会貢献活動
- 22 | 連携自治体との協働促進に向けて
- 26 | 5年間の成果
- 28 | 大学COC事業の継続と発展に向けて
- 31 | 資料編

## 地（知）の拠点整備事業（大学COC<sup>®</sup>事業）とは

大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学等を支援する文部科学省の事業です。課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としています。

\*COC=Center of Community

## ごあいさつ



学長 | 大瀧 純一

杏林大学が進めている「地域交流」は、総合大学としての特長を活かして健康・福祉、地域活性化、防災などさまざまな分野に渡っております。これらの遂行に関しては、本学の教職員、学生が一丸となって、教育・研究・社会貢献活動に取り組んでいるところです。

平成25年度に本学のこれまでの取り組み成果が結実する形で、文部科学省『地（知）の拠点整備事業』に採択され、「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合地の拠点」というテーマで5年間の取り組みを進めてまいりましたが、平成29年度をもって終期を迎えることとなりました。この事業は、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」の3分野を軸に本学のこれまでの地域交流活動を、教育・研究・社会貢献の面において全学的に発展させ取り組んできたものです。

また、平成27年度には、COCの継続事業である『地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）』において、岩手大学が中心となって進める「ふるさといわて創造プロジェクト」に参加校として関わり、地方の魅力向上に資する取組や地域が求める人材の育成に首都圏大学として取り組んでおります。

今後も本学では「地（知）の拠点」としての役割を果たせるよう、地域に貢献できる人材の育成や地域との特色ある連携に力を入れて参りたいと考えております。大学COC事業の成果を御覧いただくとともに、本学の活動に引き続きのご支援のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。



地域交流推進室 室長 | 古本 泰之

本学は平成25年度『地（知）の拠点整備事業』において「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合地の拠点」というテーマで採択され、その活動を続けておりましたが、平成29年度が事業最終年度となりました。これまでの各種事業の実施は、本事業の連携パートナーである東京都三鷹市・八王子市・羽村市の皆様のご協力無しでは成立することはなく、心より感謝申し上げます。本報告書は、これまでの5年間における事業の取り組みをまとめたものとなります。

5年間の事業を概観致しますと、全学1年次必修科目『地域と大学』の設置完了等、教育の地域志向化に一定の実績を得られたことが最大の成果かと考えます。また、『生きがいづくりコーディネーター養成講座』（平成30年度より『高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム』に統合）や、平成25年に新たに設置した杏林CCRC研究所を軸とした公開講座の充実といった、地域住民の方々との学び合いの機会が井の頭キャンパスの設置を契機に飛躍的に増加いたしました。

『地（知）の拠点整備事業』は平成29年度で終了いたしますが、本学の地域連携活動は引き続き積極的に展開してまいります。また、岩手県を舞台とする『地（知）の拠点大学による地方創生推進事業』に平成27年度に参画した（平成31年度まで）ことを受けて、首都圏大学の地方創生への取り組みもさらに進めていく所存です。

本報告書をご一読いただき、事業終了後の活動の継続にさらなるご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



## 杏林大学COC事業概要

# 新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点

連携自治体・東京都三鷹市/東京都八王子市/東京都羽村市

### 地（知）の拠点として

本事業が対象とする東京都三鷹市・八王子市・羽村市は地域内に退職した団塊世代を多く抱え、多様な課題に直面している。

本事業は、この3自治体と連携し、良医を育成する医学部、健康づくりをはじめとして助産から高齢者のリハビリテーション・生活支援までを扱う保健学部、社会問題に俯瞰的・学際的視点で取り組む総合政策学部、創造的なコミュニケーションとホスピタリティのプロを育成する外国語学部の教育・研究資源を動員し、包括的地域連携を推進する杏林CCRC: Center for Comprehensive Regional Collaborationを構築し、問題解決力を有する学生を育成するとともに新しい都市型高齢社会の姿を模索していく。

### 教育 | 地域志向化の促進

地域との協働による課題解決を通して地域志向かつ問題解決力を持つ学生を育成し、なおかつ新しい都市型高齢社会の姿を模索する。すなわち、『都市型高齢社会の健康と安心』を主題に、学生と地域関係者が共に学び、本学の教育・研究機能が集中する予定の三鷹市を中心に取り組みを進め、次に八王子市・羽村市にもその成果を反映していく。

さらに医学部・保健学部・総合政策学部・外国語学部の地域

に関連する既存科目の整理・統合に加え、地域志向の教育を推進するために科目の新設を行い、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」をテーマに据えた「ウェルネス科目群」を設置する。ウェルネス科目群は地域関係者も受講可能とし、地域をフィールドにPBL (Problem Based Learning) 型の演習や地域内でのボランティア・インターンシップを行い、学生と地域関係者が学び合いながら、地域の課題解決を目指す。

### 研究 | 杏林CCRCの構築

本事業では、三鷹市・八王子市・羽村市と連携し、本学4学部の教育・研究資源を動員し、包括的な地域連携を推進する杏林CCRCを構築する。この拠点として「杏林CCRC研究所」をJR三鷹駅前に設置し、専任の杏林CCRC特任教員2名と各

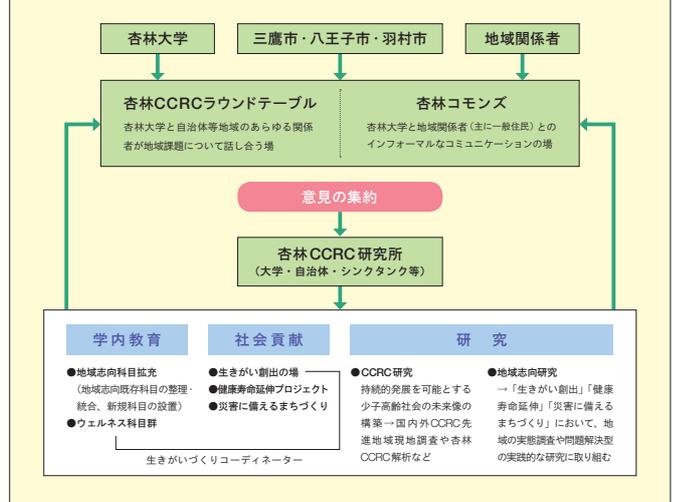
学部からの1名の兼任教員で構成する。平成25年度から杏林CCRCについて集中的に研究を行うとともに、教育・研究・社会貢献の体制を強化する。

### 社会貢献 | 地域連携の場を設置

杏林CCRC研究所を軸として、会議体としての「杏林CCRCラウンドテーブル」および地域と本学の知的交流の場となる「杏林 commons」を連携自治体の中心市街地に設ける。「杏林CCRCラウンドテーブル」は本学と自治体、商工会議所等各団体、NPO法人等地域の関係者が一堂に会して地域課題について話し合う場である。杏林 commonsでは、杏林CCRC

研究所等で提示された課題をテーマとして、e-learning等のICT (Information and Communication Technology) を活用し、地域と大学との知の共有の場、学生と地域関係者との学びあいの場（生涯学習の場・生きがいづくりコーディネーター養成）として活用する。

### 事業概要図



### 連携する地域とその課題 (平成25年度段階)



# 5年間のあゆみ

## 平成25年度

8月

- ▶ 文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」採択  
「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」

9月

- ▶ 東京都三鷹市と包括連携協定締結

10月

- ▶ 吉林CCRC研究所 開設  
保健学部教授 湯生忍氏（現：吉林大学名誉教授）を吉林CCRC研究所長に任命（平成30年度～医学部教授 長島文夫氏に交代）
- ▶ 地域・大学間コーディネーター 配置  
井上晶子氏（現：地域交流推進室特任講師）をコーディネーターに任命

11月

- ▶ 第1回吉林CCRCフォーラム、吉林CCRCラウンドテーブル開催  
テーマ：「地域社会における大学の未来像—地域の持続的発展にむけて—」
- ▶ 第2回吉林CCRCフォーラム開催  
テーマ：「街じゅうみんなで—地域で子育てを支え、虐待を防止するために—」



第1回吉林CCRCフォーラム

12月

- ▶ 海外出張  
米国シアトル市、フェニックス市、サンフランシスコ市の老人施設視察・意見交換
- ▶ FD・SD活動  
事業の理解とビジョンの共有を図る—職員研修会—

平成26年 1月

- ▶ 国内出張  
北陸地方の大学COC事業採択校（福井大学、富山県立大学、金沢工業大学）の訪問と意見交換
- ▶ FD・SD活動  
三鷹市との協働・連携を一層深める—三鷹市長 清原慶子氏による講演会—
- ▶ 吉林CCRC研究所セミナー 開始



三鷹市長による講演会

2月

- ▶ 地域志向教育研究経費募集・採択（～平成29年度）

## 平成26年度

5月

- ▶ 吉林大学公開講演会の活性化（～平成29年度）  
地域交流推進室・吉林CCRC研究所が広報・企画調査室と連携し、共同開催が本格化

8月

- ▶ 「生きがいづくりコーディネーター養成講座」募集・開講（～平成29年度）

9月

- ▶ 地域志向科目『地域と大学』を総合政策学部・外国語学部で開講  
地（知）の拠点整備事業としての吉林CCRCの概念や、2年次以降の学習の基礎として地域における大学の役割や地域を取り巻く課題、地域での学び方などについて解説。また、本学が軸とする八王子市、三鷹市、羽村市の関係者の方を招き、各市3週にわたり、講義や演習による授業を開講
- ▶ 第三者評価委員会開催（～平成30年度）
- ▶ 国内出張  
近畿地方の大学COC事業採択校（奈良県立大学、兵庫県立大学、京都大学、和歌山信愛女子短期大学、大阪市立大学、神戸市看護大学）の訪問と意見交換

10月

- ▶ FD・SD活動  
「地域志向活動、どのように取り組むか？」—教職員研修会—
- ▶ 吉林COMONS運用開始  
地域・大学間コーディネーターおよび吉林CCRC研究所主導により連携市に地域からの声を聴くルートを整備

平成27年 2月

- ▶ 第2回吉林CCRCラウンドテーブル、第3回吉林CCRCフォーラム開催  
ラウンドテーブルでは連携市の市長に活動の報告をするとともに、活動を促進するうえで市の課題や要望などについて意見交換を実施。フォーラムでは地域志向教育研究経費において推進した地域を志向した教育・研究と、教育に関連した社会貢献活動の成果を発表

海外出張

- ▶ 米国カリフォルニア州の日系米人及び在米邦人社会の高齢者施設調査

国内出張

- ▶ 地（知）の拠点整備事業シンポジウム～COC全国ネットワーク化事業～（高知県）参加（～平成29年度）

3月

- ▶ 吉林CCRC研究所紀要発刊（～平成29年度）



生きがいづくりコーディネーター養成講座の授業



地域志向科目『地域と大学』（総合政策学部・外国語学部）

## 平成27年度

4月

▶地域志向科目『地域と大学』を4学部で開講

5月

▶杏林CCRC研究所 金曜サロン開催

8月

▶文部科学省  
「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)への参画  
「ふるさと創生プロジェクト」  
(COC+大学:岩手大学、参加校:杏林大学他、岩手県内6高等教育機関)



COC+事業 ふるさと創生プロジェクト協議会

12月

▶国内出張  
東北地方の大学COC事業探択校(岩手大学、福島大学)の訪問と意見交換

平成28年 2月

▶第3回杏林CCRCラウンドテーブル、  
第4回杏林CCRCフォーラム開催  
▶COC+事業「ふるさと創生プロジェクト」出席



FD・SD活動

3月

▶FD・SD活動  
「複雑課題への解決方法—ホールシステム・アプローチ—」

## 平成28年度

4月

▶地域志向科目『地域と大学』を4学部合同で開講

5月

▶地域連携ワークショップ「まちづくりに『新しい風』を」開催  
八王子市から三鷹市にキャンパスを移転したのを機に、新キャンパス(井の頭キャンパス)において、大学、市民、事業者、行政関係者などが参加してワークショップを開催



地域志向科目『地域と大学』(4学部合同)

▶国内出張  
「生涯活躍のまち・いずも」(島根県)、島根大学医学部附属病院訪問と意見交換

6月

▶杏林CCRC研究所コモンズ開催

▶国内出張  
「オークフィールド八幡平」(岩手県)での意見交換・資料収集



地域連携ワークショップ「まちづくりに『新しい風』を」

9月

▶(株)アトレと地域貢献パートナー協定締結  
▶杏林CCRC研究所 連続講座 開講  
隔週金曜日、「心理学」「死生学」をテーマに連続講座を実施  
▶大学COC事業中間評価受審(平成29年2月公表)  
評価結果:A評価

11月

▶国内出張  
「オークフィールド八幡平」(岩手県、岩手大学、岩手県立大学との意見交換)

平成29年 2月

▶第4回杏林CCRCラウンドテーブル、第5回杏林CCRCフォーラム開催  
▶連携3市との協働ワークショップ 開催  
大学COC事業で連携する自治体と大学(学生・教職員)が協働して「長寿社会における災害時の地域づくり」をテーマにワークショップを実施



連携3市との協働ワークショップ

3月

▶FD・SD活動  
「岩手と杏林大学が連携して創造できること」—教職員研修会—



FD・SD活動

## 平成29年度

6月

▶杏林CCRC研究所 公開講座 開講  
平成27～28年度に開講した金曜サロン、連続講座をそれぞれ連携市において発展的に公開講座として6月と10月に開講



FD・SD活動

7月

▶FD・SD活動  
「地域連携による学びの共有と高大接続  
—共栄学園前橋国際大学の事例—」—教職員研修会—

9月

▶国内出張  
地域と大学を繋ぐコーディネーターのための研究実践セミナーに参加

11月

▶COC+事業「ふるさと発見! 大交流会in IWATE 2017」に参加

12月

▶国内出張  
ひょうご神戸プラットフォーム第3回COC+シンポジウム



ふるさと発見! 大交流会in IWATE 2017

平成30年 1月

▶杏林CCRC研究所 市民公開シンポジウム  
5年間の活動を総括するシンポジウムを開催

2月

▶第5回杏林CCRCラウンドテーブル、第6回杏林CCRCフォーラム開催  
▶COC+事業「いわて・杏林交流プロジェクト」実施  
外国語学部科目「フィールドスタディV」を岩手県釜石市で開催

▶FD・SD活動(第6回杏林CCRCフォーラム同時開催)

3月

▶3市連携事業を開催  
大学COC事業で連携する3市(東京都三鷹市、羽村市、八王子市)と「防災に関するワークショップ」を実施。3市が共通して取り組むことができる防災に焦点を絞り、具体的な対策や解決方法を考える機会を提供



連携3市との「防災に関するワークショップ」



## 教育の地域志向化に向けた取り組み

### 全学1年次必修科目『地域と大学』の展開

本学においては、「高い倫理観と社会的責任能力」がディプロマ・ポリシーのひとつとして定められている。その能力を充足するための全学的基礎科目として、大学COC事業採択を契機に『地域と大学』（1年次必修科目）を設置した。その内容は「杏林COC構想の理解」「課題解決を目的とした手法の習得」「地域課題への理解」の3点から構成されている。

平成27年度までは各学部において個別に開講（総合政策学部・外国語学部は合同開講）していたが、平成28年度の井の頭キャンパスの開設によって4学部の距離が隣接したため、新たな取り組みとして4学部混成の教室を設け、PBL<sup>®</sup>形式の授業（7教室・215グループ計1,224名）を全4回設置した。

(※) 問題解決型学習 | Problem Based Learning

### ① 4学部混成授業

全1年生（定員1,283名）が前期・金曜日4限に井の頭キャンパスで受講している。全11教室で展開され、講演形式の授業は親教室からの映像配信で対応している。課題解決を学ぶ上での内容面での共通化を図るため、「杏林COC構想」に基づき、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」を中心的なテーマとして置いている。

まず各学部において、「自学部から見た地域課題」「杏林COC

構想」「先輩の取り組み」といった基礎的な情報を得る機会を設けている。それを踏まえ、課題解決に資する手法を修得する回に展開しているが、ここから4学部の混成クラスとなる。4学部の教員からなるチームを教室ごとに編成し、ベースとなる教案（ビデオ等を活用）を全教員で共有した上で、各教室で同内容を展開する形を取っている。また、保健学部・総合政策学部・外国語学部からSAを導入し、教室内のサポートを強化している。



### ② 各学部における展開

その後各学部に分かれ、所定の回数の講義を展開する。

#### ① 医学部

学生を7～8人ずつのグループに分け、各グループのテーマにふさわしい場所（原則として三鷹市内）を訪問・活動し、秋に発表会を行う流れで構成している。「三鷹市の医療・福祉等」をコース全体のテーマとし、各グループワークのテーマはグルー

プ内で話し合って決定している。各グループには、相談役とし専任教員を1名ずつ割り当て、三鷹市役所および三鷹市医師会に全面的な協力をいただいで展開している。



#### ② 保健学部

保健学部の『地域と大学』は全8回で構成されており（看護学科を除く）、4学部混成クラス以降は、「医療・保健の視点から見た地域課題」についてのレクチャーに加え、地域課題の解決に向けた提案発表（総合政策学部・外国語学部と合同）を行っている。看護学科では、必修科目「福祉・地域と大学」が全15回で構成されており、8回までは他学部と合同で行い、9回から15

回は学科独自に授業を展開している。「福祉・地域」に大学がどう関わるかを追求するのがこの科目の目的であり、どのような社会の中で私たちは生きているのかを見つめ直し、暮らしに困難さを感じる人を地域でどう支えたいのか、そこに大学がどう関わるかを講義している。

#### ③ 総合政策学部・外国語学部

4学部混成クラス終了後、保健学部との合同回（内容は上記）を実施し、その後は総合政策学部・外国語学部の学部混成クラスで実施している。2年次以降の地域課題解決に取り組む科目を意識し、簡単な地域課題を題材に、課題解決の手法の基礎を修得することが大きな目的となっている。

そのため、連携自治体の関係者から当該地域の概要と地域課題に関するレクチャーを受けた後、グループ（6人で構成）に分

かれて提示された「お題」に関する解決策提示の作業を行っている。その成果は、ランダムに選ばれたグループが発表し、連携自治体にフィードバックされる。

また、COC+事業への連結として、岩手大学を中心とする「ふるさと創生プロジェクト」の関係者によるレクチャーを最終回に設定している。



この科目に対する学生へのアンケート結果（P33参照）を見ると、連携地域の現状と課題の把握、大学が地域と連携する意義への理解、問題解決能力の習得に加え、自身の暮らす地域への関心に高まりが見られ、地域交流活動の「入口」としての機能を『地域と大学』が果たしていると言える。

#### 『地域と大学』の特徴

「地域と大学」担当教員：保健学部 准教授 朝野 聡

大学COC事業のもと本授業は全学部の新入生（約1,300名）に対して必修開講している。地域社会を取り巻く現代的課題を理解し、多様な学生の潜在力、学部ごとの専門スキルを地域社会でどのように活用していくかについての学びの場となることを意図している。一方的な講義とならないようゲーム形式の討論を取り入れ、学生間のコミュニケーションが楽しめる構成となっている。1,300名の学生が6～8名の小グループにシャッフルされ活発に討論するさまは壮観である。ここから生まれる「気づき」が学生たちの地域活動への契機になり花開くことを願っている。

### 各学部における地域志向科目の展開

#### 総合政策学部『プロジェクト演習』

総合政策学部では、『プロジェクト演習』（2年生以上、選択科目）を開講し、地域志向科目として地域課題に取り組んできた。

例えば、平成27年度のプロジェクト演習（担当：進邦教授、マールコム・ヘンリーフィールド教授、三浦講師（副書は当時））は、大学COC事業における本学の取り組みテーマのうち、『災害に備えるまちづくり』をテーマとして展開した。その中で、『災害時の合意形成』を題材として、生きがいがづくりコーディネーター履

修生を交えて授業を展開した。災害時の課題解決にあたっては、それぞれが役割を分担した合意形式で相互に連携することが重要となる。この回では、様々なアクティビティやワークショップを行いながら、組織を運営していくリーダーの役割やコミュニケーションの取り方を学んだ。在学生と生きがいがづくりコーディネーター履修生とが混ざり合い、二人三脚や数学並べなど、普段とは違った状況での合意形式を体験的に学ぶ機会となった。



#### 外国語学部『プロジェクト演習』

外国語学部では、大学COC事業の採択を受けて新たにPBL型科目である『プロジェクト演習』を設置し、英語学科・中国語学科2年次以上選択科目、観光交流文化学科2年次以上必修科目とした。この科目では、地域に内在する課題を発見するための文献資料研究、課題の現状を把握するためのフィールドワーク、調査結果の分析に基づいた課題解決策の策定、その提示（レポートないしはプレゼンテーション）という一連の流れを展開し、

『地域と大学』で導入した地域社会が抱える諸問題を分析的に捉え創造的に解決策を策定する手法を定着させる内容としている。

例えば平成28年度は、「羽村市商店街の現状調査とにぎわい創出実現の考察」「滝山城跡周辺の観光地をにぎわわせるための改善点検討」など16件の課題調査が実施され、その結果はフィールドワークの場において多大な協力を受けた各市役所に対してフィードバックされた。



#### 保健学部『応用理学療法学』『理学療法概論』

保健学部の地域志向科目の展開について理学療法学科を例に挙げる。

まずは1年次の『理学療法概論』において包括的リハビリテーションサービスの概要として、急性期から回復期、地域生活支援までの理学療法士の取組を解説する。加えて本学で取り組んでいる「健康寿命延伸プログラム」など実際の活動を元に理学

療法地域貢献への理解を拡げている。さらに3年次の『地域理学療法学』、4年次の『応用理学療法学』で理学療法の専門性を地域で活かせるように、技術・知識の向上を図っている。

今後は更に臨床実習においても地域性を高めた臨床教育ができるように努めていきたい。





## 杏林CCRC研究所をととした 知の創造・知の提供

### 都市型超高齢社会における杏林CCRCの役割と課題

杏林CCRC研究所 所長（平成25～29年度） 蒲生 忍

#### はじめに

杏林大学では、平成25年に文部科学省大学教育改革事業「地（知）の拠点整備事業（COC）」に首都圏の超高齢化の課題に本学の大学知を結集して取り組む事業として課題名「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」が採択された。本事業の申請にあたり、日本が超高齢社会であり都市集中型社会であること、本学が立地する三鷹市、八王子市、また羽村市がその典型であるとし、介護医療資源の逼迫とその他を含めた資源の偏在を最重要課題として挙げた。この地域課題に本学の教育・研究資源を動員して新しい都市型高齢社会の変を模索する拠点、即ち「包括的地域連携を推進する拠点Center for Comprehensive Regional Collaboration：杏林CCRC」を構築することを目指してきた。CCRCとは、元来はContinuing Care Retirement Communityの略で、退職世代に継続的にケアを提供するモデルとして米国等で提案された用語である。生涯活躍の街と表現される「日本版CCRC」も米国の退職者コミュニティに基づき移住等を念頭に置いた提案であるが、我々の目指した所は都心部で就労していた団塊世代が退職後も今後も継続して住み慣れた地域で継続して健康に生活でき、生きがいを持って暮らせる安全で安心な街づくりに大学として貢献することである。

この杏林CCRC構想の中核として、「杏林CCRC研究所」を三鷹産業プラザに開設し、研究所長は蒲生（保健学部教授・28年より特任教授）が勤め、実績があり将来が囑望される若手研究者松井孝太（現・総合政策学部講師）と相見祐輝（現・医学部特任助教）を特任助教として採用し活動を開始した。本事業の最終年度にあたり、本学の「知の普及」活動として公開講演会、CCRC研究所の「知の創造」活動として地域志向教育研究と研究所の主導する研究について紹介する。

#### 知の普及：公開講演会等の開催

COC事業以前の大学の普及活動は、主に大学の広報活動と八王子学園都市センターでの大学間連携事業の一環と位置付けられていた。前者は広報企画調査室が主管する公開講演会であり、平成24年度は15回されていた。後者は八王子学園都市大学いちょう塾への講座提供で43回の合計58回であった。

平成25年度のコC事業申請に際し、杏林CCRC構想の具体的目標として「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」の三テーマを設定し、それに関する生涯学習機会を、八王子市のいちょう塾に加えて、三鷹市の「三鷹ネットワーク大学」、羽村市の「生涯学習センターゆとろぎ」等を活用し積極的に提供することとした。ただ、年度途中のため、追加は困難で25年度は公開講演会15回、いちょう塾36回、その他10回の合計60回と前年度と同レベルの実施であった。

平成26年度以降、公開講演会等の開催は連携市の三鷹市、羽村市での開催、地域志向教育研究や地域活動に関連する講演会やセミナーは増加した。

平成28年度は公開講演会26回、いちょう塾24回、地域志向教育研究・地域活動関連31回、生きがいづくりコーディネーター関連49回、さらに研究所の主催する連続講座やセミナー等19回等を含め182回、116名の教員が参加した。

平成28年4月に保健学部、総合政策学部、外国語学部が八王子市から三鷹市井の頭キャンパスに移転し、これに伴い本学の開催する公開講演会の会場として井の頭キャンパスが加わった。平成28年度は、公開講演会を26回を実施した。このうち21回が医療系をテーマとしたCOC事業の健康寿命延伸にかかわるものである。26回の講演会では重複を含め医学部教員23名、保健学部2名、総合政策学部3名、外国語学部2名付属病院職員2名、学外の本学関係者3名、合計35名が講演者を担当した。開催場所はCOC事業で連携する三鷹ネットワーク大で6回と本学三鷹キャンパス8回、井の頭キャンパス5回、八王子市4回、羽村市3回である。井の頭キャンパスでの講演会の開催は土曜日の午後で、講演会参加の多くの市民が学生に混じり食堂での飲食や雑談を楽しんでおり、新キャンパスがより一層の大学の公開と地域との交流契機となることが期待された。各年度の公開講演会には研究所から可能な限り参加し、参加報告を作成し研究所ホームページに掲載すると共に、研究所紀要に掲載した。

さらに28年度からは「生きがいづくりコーディネーター」課程のウェルネス科目群を本格的に運用し、課程受講市民への公開等により、質量共に増加した。

平成29年度は途中経過ながら公開講演会24回、いちょう塾14回、地域志向教育研究・地域活動関連42回、生きがいづくりコーディネーター関連69回、研究所の主催する連続講座やセミ

ナー等6回等を含め192回、138名の教員の参加が決定している。公開講演会としての開催されているものの総受講者数25年の約800名から28年は2070名、29年は12月末までと4回を残す段階で既に28年を越え2200名となった。平均受講者数は25年の約80名から29年は約125名（12月末）と増加しており、生涯学習の需要は顕著に増加している。

#### 知の創造：地域志向教育研究

本学は医療機関を含む大学であり高齢者の医療に関する研究は相当する実施されていたが、本事業開始前には「地域」を意識した体系的で統一的な理念に基づく研究活動の推進体制は整備されていなかった。当時の地域志向した研究活動を、本学の平成24年度研究業績集に探ると、文部科学省や厚生労働省の公的研究費等による研究の中で、課題名に「地域」という語を含む研究は2件、「高齢」という語を含む研究は11件である。平成25年度の本事業申請時に地域志向する教育研究の理念を明示し、「地域志向教育研究」制度を創設し体系的に研究活動を推進することとした。

「地域志向教育研究」制度は、地域志向する研究を振興するため最大50万円の研究費を交付する競争的研究補助事業で、採択後にその募集要項、研究費取扱要項等を制定した。COC事業連携市をフィールドとする萌芽的取組に対し2年間を限度し、以降は他の競争的補助制度等に移行すること、もしくは地域貢献活動として定着することを期待した。また、地域志向教育研究の成果は本紀要に「報告」または「論文」として掲載することとした。平成25年度申請時における目標を「地域との共同研究」を11件、「地域との共同研究を行う教員数」を13名とし、また最終年度平成29年度の目標を研究20件、教員数60名とした。

平成25年は平成26年度以降の本格的運用に向け研究一件（50万円）を試行することとし、研究所より提案した研究課題「生活習慣病の遠征的背景に関する研究：高齢者ネット社会でのDTC検査の問題点」を試行し、来年度以降広く学内公募を実施可能とする体制を整えた。平成26年度以降「地域との共同研究」より「地域貢献活動」を分離し、最終年度の「地域との共同研究」10件とそれを行なう教員数23名、「地域貢献活動」の目標を20件、合計で30件と上方修正した。

平成26年度は地域志向教育研究として9件の研究テーマを採択し、そのうち研究所提案の「杏林大学と地域医療の情報ネットワーク構築の基盤技術に関する検討」他7件について研究助成を行った。研究活動は概ね平成26年5月頃に着手され、研究活動の報告の機会として研究所セミナーにおいて研究中間報告を実施し、本補助事業のテーマである「杏林CCRC構想」を意識した研究活動を推進されていることを確認した。研究の中間報告等は研究所紀要に掲載した。

平成27年度は地域志向教育研究として研究所提案の「杏林大学と地域の医療情報ネットワーク構築に向けた検討」他、合計9件の研究テーマを採択した。平成28年1月から2月に研究成

果の取りまとめに向けた報告を研究所セミナーとして開催し成果を確認した。さらに地域志向教育研究9件の成果は紀要に長谷川利夫保健学部教授（研究所副所長）「報告論文」（1編）または「報告」（8編）として掲載した。

平成27年度に実施した地域志向教育研究の中で、「健康寿命延伸」に関する保健学部芝原美由紀教授の「障がい者スポーツボッチャによる高齢者の体力づくり」、医学部山田深講師の「リハビリテーション医学・宇宙医学研究成果のアウトリーチ：宇宙飛行士の健康管理をモチーフとした地域における教育プログラムの実施」、「生きがい創出」に関する保健学部太田ひるみ教授の「大学生と当事者の連携による発達障がい児の余暇活動支援ネットワーク」、総合政策学部木暮健太郎講師の「羽村市における若年層を中心とした地域活性化に関する研究」等、多くの学生が積極的に研究遂行の補助者やボランティアとして参加した。これにより研究としての成果を挙げるのみならず、学生が地域の抱える課題に直面し解決に向けた研究の重要性を体感し学修する機会となった。

平成28年度地域志向教育研究の公募に際し7件の応募があり、研究所提案の「超高齢・多死社会における死生学教育ツールの開発」他合計5件を採択した。平成28年5月より研究活動に着手し、その成果は紀要に「論文」2編と「報告」3編として掲載した。これに加え過年度の地域志向教育研究の自主的な継続0件と自主的財源や外部研究助成による5件、合計16件の地域志向した教育研究活動が実施された。関与した教職員数は46名（延べ50名）である。保健学部橋田らによる「大学生と当事者の連携による発達障がい児の余暇活動支援の成果と今後の課題」は26年、27年の地域志向教育研究の助成を受け、28年も活動を継続し、その成果を28年度紀要に論文として報告した。自主的財源等によるものは、研究所副所長長島文夫（医学部准教授）が「みたか都市創造サロン」に参加して「がんを背景に持つ多様な病態をもつ患者の食に関する情報提供」、兼任研究員下島（保健学部准教授）の「地域で取り組むインクルージョン教育」、医学部金城の「三鷹市における尿失禁、骨盤臓器脱を伴う女性骨盤底障害の実態と意識調査」等である。地域志向教育研究経費は継続2年と限定し不採択とせざるを得ない応募もあったが、本事業終了後の継続を含め地域の団体等との協働や活動資源の確保が確実に進行している。

本学のCOC事業は都市型高齢社会での「健康寿命延伸」と「生きがい創出」により医療・介護需要の増加に対応すること、また「災害に備えるまちづくり」で弱者としての高齢者の安全に配慮することを意図している。この事業構想に基づく地域志向教育研究活動により、本学の教職員の地域との直接的な関わりが増加し、また問題意識が向上し積極的な地域課題へのかわりが増進されている。医学部リハビリテーション医学山田准教授の地域志向教育研究（27-28年度）は地域のプロジェクトの協力を得て実施された。医学部整形外科学市村正一教授は地域志向教育研究（28-29年度）の一環として三鷹市老人クラブ連合会とのロコモティブシンドロームに関する協働事業を実施した。この事業は平成29年度に三鷹市との協働事業への発展が決定した。

平成29年度の地域志向研究は「地域志向教育研究」として7件、他施設に所属する者3名、市民3名と教員のべ32名が参加した。研究所員が「地域志向教育研究」費以外の学内外の競争的資金で行なう地域志向研究は9件で、教員のべ16名が参加した。文部科学省、厚生労働省等の公的競争的研究費で課題に「地域」を含むものは6件、「高齢」を含むものは8件、「地域」と「高齢」の二語を含むものは1件の合計15件、教員のべ15名となった。28-29年に実施した外国語学部古本泰之准教授らによる地域志向研究「災害に備えるまちづくり弱者対応の観点から」では生きがいづくりコーディネーター養成講座の修了者が研究に参加した。また地域研究活動に参加を希望する市民で適切な者を市民研究協力員として研究所に受け入れるための制度「市民研究協力員についての制度規則」を29年度に定めた。平成25年に体系的に地域志向する萌芽的な研究を推進する体制を確立し、順次学外の公的助成に移行することとした。29年には当初の目標10件を大きく超える地域を意識した研究活動が行われた。また、多くの大学教職員や学生が研究活動に積極的に取り組むこととなった。まだ萌芽的ではあるが市民との協働による研究活動も開始された。学生も研究の補助者やボランティアとして参加すること、それにより地域の抱える課題に学生自身も直面すること、その解決に向けた研究の重要性を体感することが定着しつつある。

## 知の創造：研究所の主導する研究活動

### 研究所の体制

事業採択を受け、吉林CCRC研究所を開設し、米国の医療制度に詳しい東京大学大学院教授磯口範雄氏と米国CCRCを広く国内で紹介した三菱総合研究所主任研究員松田智生氏に客員研究員を委嘱した。平成27年4月長谷川利夫保健学部教授を、平成28年7月に長島夫医学部准教授を副所長にむかえた。平成28年4月、研究所特任助教松井孝太が総合政策学部講師として移動し、研究所の兼任研究員となり、総合政策学部・外国語学部における地域研究活動の中核となった。また研究所特任助教相見祐輝が医学部特任助教に転出した。保健学部照屋浩司教授、同下島指美准教授を兼任研究員とし保健学系との研究活動の連携強化を図った。平成28年5月に吉林CCRC研究所を三鷹キャンパス内看護学教育研究棟に移動した。平成28年10月に国立がん研究センターがん臨床研究機構の水谷友紀部長に客員研究員を委嘱した。

研究所では学内外より講師をむかえ月例の研究所セミナーを開催した。また、研究所では学外で開催された「高齢社会」及び「地域課題」関連の講演会や研修会に積極的に参加し、各所で活動や研究の動向を把握することに努めた。以下、研究所において取組んできた研究の中からCCRC研究、ICT地域医療連携研究、死生学研究について概説する。

### CCRC研究

CCRC研究は主に松井と蒲生が担当し、客員研究員の樋口、

松田の協力を得た。

今後の都市の超高齢化に伴い、高齢者の生活、健康、介護、医療は極めて重要な課題であり、日本創生会議による「首都圏危機回避戦略」等、様々な提言が行われてきた。本学のCCRC構想も同じ課題に対し首都圏に所在する医療系の学部を持つ総合大学として積極的な役割を果たすことを目指した。研究所はその指針を明確にする役割を持ち、米国のCCRCについて詳細に検討すること、また国内への適用の課題を探った。

このため、平成25年と26年に、米国ワシントン州シアトル市、アリゾナ州フェニックス市、カリフォルニア州サンフランシスコ市のそれぞれ数カ所のCCRCを訪問し、その設立の経緯や現在の経営上の課題を調査した。米国のCCRCは地域や設立基盤により多様性を有している。高齢者に理想的な環境を提供することを目指しているが、経営的な課題を抱える場合もある。公的な医療介護保険制度を持たない米国のシステムを日本に運用するためには幾つかの法的規制や意識的な障壁を超える必要があることが示唆された。この研究の成果は論文及び報告としてまとめ研究所紀要に掲載した。また、27年には都市型高齢社会の医療や介護に関する各種提言の問題点についての考察や国内での取組である日本版CCRCとの比較についても検討し、論文及び報告としてまとめ研究所紀要に掲載した。平成28年度には若手泉八幡平市の日本版CCRCの先進事例「オーフィールド八幡平」の実地調査を複数回行い、特に都市からの移住者には希薄な公共交通機関や晩冬期の生活等の課題がある事等を指摘し、研究所紀要にその報告を掲載した。

### ICT地域医療連携研究

ICT地域医療連携に関する研究は主に相見と蒲生が担当し、学内の関係者、学外の情報企業関係者等の協力を得た。

本学の所在する三鷹市も平成28年には高齢化率が21%を超え、超高齢社会に突入した。過去数年間で吉林大学の付属病院の受診者の高齢化は顕著である。急性期を担当する大学病院等、回復期を担当する一般病院、慢性期を担当する診療所と医療機関の役割分担が進む中で、医療情報の共有化・ネットワーク化し医療機関間の緊密な連携と情報共有を併せて推進することは喫緊の課題である。医療情報ネットワーク構築には膨大な費用を必要とするが、ネットワーク自体の必要性は明白であり近期中に何らかの形でその構築が求められるであろう。平成26年と27年度には、地域の医療情報ネットワーク構築に関する勉強会を継続的に開催し、ICTを利用した医療情報連携についての背景等を整理した。新たな連携の観点として近隣の医療機関等に参加を呼びかけた講演会「ICTを用いた地域医療ネットワークの近未来」を開催した。また、本学付属病院を中心とする医療情報ネットワークの可能性と需要を探るため、多摩地区の医師会、三鷹市の病院施設に対するアンケート調査を実施し、その結果を研究所紀要に報告した。

勉強会や調査等において、種々のネットワークの可能性、各医療機関が求めるものの差違、導入経費や運営主体等の現実的な課題も示され、今後の連携導入に向けた情報整理ができた。



蒲生 忍 吉林CCRC研究所 前所長

### 死生学研究

都市の超高齢社会における高齢者の生活は衣食住や医療の選択等に多くの課題を抱える。若年層にとって便利で快適な生活空間が、高齢者にも快適とは限らない。死生学を単に死そのものを考察する学際分野としてではなく、より広く終末期を含めた高齢期の生の充実を図る学と捉えることも可能である。研究所では平成27年に地域住民とのモモンズ活動としての「金曜サロン」を「死生学」と「シニアライフ」をテーマとして開催した。各サロンは問題提起と地域住民との意見交換を含めた形式とし、両テーマとも月1回、死生学は8回、シニアライフは7回開催した。ここでは高齢者を含む地域住民と若手教員との世代間対話が行われた。金曜サロンは各回一時間半程度を予定しながら、毎回三時間を超えた地域住民・高齢者との活発な意見交換が行われ、多くの意見や感想が提示され、地域の課題と要望、考え方を汲み取ることができた。

この金曜サロンは28年度に地域志向教育研究「超高齢・多死社会における死生学教育ツールの開発」へと発展し、その一部として所長蒲生と兼任研究員下島が三鷹ネットワーク大学でそれぞれ四回の連続講座「はじめての死生学」、「日常生活にちよと役立つポジティブ心理学」を実施した。29年度にはいちよう塾及び三鷹ネットワーク大学で連続講座「はじめての死生学」、「日常生活にちよと役立つポジティブ心理学」を実施した。

死生学では「死の瞬間Death and Dying」で知られるエリザベス・キューブラー＝ロスの活動と人生を主題に取上げた。キューブラー＝ロスの自身の活動は紆余曲折するが、受講者からはその真摯な人生に対し多くの共感が寄せられた。受講者の過半は講座担当者よりも経験豊富な高齢者であり、講座自体には未だに躊躇がある中、熱心にご聴講いただき、むしろ多くの示唆と教訓を得る機会となった。これを本学の医療提供者を目指す学生の教育に生かすことが出来ればと考える。

心理学では日常生活をより豊かに生きる方策を探るポジティブ心理学に注目した。小グループで共有し、また続けて全体で共有するという意見交換主体の講義形式で進め、高齢者を含めた受講

者の人生経験を反映した反応をそこに読み取ることができた。研究所での従来の研究活動は平成29年度末で一区切りを向える。そのため、平成29年度の地域志向教育研究として「持続可能な少子超高齢社会後の構築：日本版CCRCに関する考察」を提案し、平成30年1月に今までの成果を集約し首都圏の高齢者の今後の自律、医療、衣食住の選択について、それぞれの専門家を招き考える公開シンポジウム「都市高齢者の今後：主体的な選択を行うために」を企画開催した。その概要は本紀要に別に掲載した。

### 終わりに

本学の医学部と保健学部の学生はその就学課程において相当の時間を地域の関係機関での実習等で過ごしている。また付属病院の活動も地域の関係機関との協働で成立している。いわば学外との協働は当然のことであり、事業開始には「地域」を意識することがむしろ少なかったのではないだろうか。またOOO事業では大学所在地の自治体を「地域」として連携したが、首都圏という立地では地域の範囲も曖昧で、地域への親密感も希薄ではなかっただろうか。29年度で最終年度をむかえ所在地自治体との連携という枠は外れるが、本事業が本学の学生、教職員が改めて「地域社会」を意識する機会となり、今後さらに連携を考え深める機会となれば幸いである。また、研究所が体制を一新し、より緊密な地域連携、医療連携の研究活動が展開されることを期待する。

(平成29年度吉林CCRC研究所紀要「都市型超高齢社会における吉林CCRCの役割と課題」より抜粋・編集)



### 今後の吉林CCRC研究所の取り組みについて

吉林CCRC研究所  
所長(平成29年度～) 長島夫夫

吉林CCRC研究所は、大学と地域の包括的な連携にむけて設置された研究所です。これまでに、「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」「生きがい創造」をテーマに掲げ、公開講演会などを実施し、多数の市民の皆様に参加していただきました。さらに、少子化や高齢化を迎えた地域社会の課題を、市民、大学、行政等が協力して解決できるよう、皆様との積極的な対話を試みています。

今後は我々の取り組みをさらに深化させ、ライフステージに応じた住みやすい地域社会の構築を目指したいと考えています。引き続き、皆様のご協力ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



## 地域における社会貢献活動

これまで本学が取り組んできた社会貢献活動を発展的に実施するとともに、本事業の「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」のテーマに基づき、新しい都市型高齢社会を構築するための基盤整備のための活動を、杏林COCOラウンドテーブルや杏林COCO研究所とともに展開した。その中でも特にニーズが高いものを「重点活動」として指定し、5年間継続して支援を行った。重点活動に位置付けたのは「子育て支援プログラム」「生涯スポーツ機会提供プログラム」「救急救命講習(AED講習)」である。また、「生きがい創出」活動の一環として、地域住民にむけて本学の講義を提供する「生きがいづくりコーディネーター養成講座」をスタートさせた。

### 「子育て支援プログラム」(テーマ「生きがい創出」)

「生きがい創出」を目的とした「子育て支援プログラム」はいくつかのプログラムに細分化されて実施された。  
「多摩多胎ネットワーク」では、主に三鷹市を対象として、多胎児を妊娠中の家族への情報提供と、妊娠出産に関する不安を減らし、育児の準備を整えることを目的とする多胎育児準備教室の開催、ピアサポーター養成講座とピアサポーター訪問事業の実施、多胎児の親の会「ツイズマーケット」の開催などを行った。

極低出生体重児の育児支援サークル「ひあんず」ではフリーターや専門家を招いての学習活動、小児科医・看護師による医療相談などを行った。  
保護者が幼児に性教育を行うための支援である「いのちのおはなし会」ではいのちのはじまり(受精)から胎児の発育→出産までの様子を胎児人形と学生の手劇で説明した。身体を守ることは、パネルで男女の子どもの身体を示し、違いを確認しうえてプライベートゾーンを自分で守ることを説明した。



### 「生涯スポーツ機会提供プログラム」(テーマ「健康寿命延伸」)

「健康寿命延伸」を目的とした「生涯スポーツ機会提供プログラム」は、平成26年度から主に羽村市民を対象にプログラムを開始した。トレッドミル、エルゴメーター、心臓負荷モニタリングシステムなどの機器を用いた体力測定や運動相談・指導のプログラムを継続して実施した。  
平成28年度は体力測定や運動相談・指導を、また多様な運動種目を体験する中で、個々に持続可能な運動を見つけること、心拍計を用いた心拍数コントロールによる適正運動負

荷量の習得を目的とし、ボールウォーキングやノルディックウォーキングなどを紹介・体験する「歩こう会」や「歩き方教室」を実施した。  
平成29年度は前年度から行っているボールウォーキングやノルディックウォーキングなどの体験に加え、ロコモティブシンドローム予防を意識づけするため体力測定、ロコモ度チェック、相談会などを実施した。また、自治体から要請を受け、地域住民の運動と健康に関する情報提供を行った。



### 「救急救命講習(AED(自動体外式除細動器)講習)」(テーマ「災害に備えるまちづくり」)

「災害に備えるまちづくり」を目的とした「救急救命講習(AED講習)」においては、学生を指導者とした救命講習を実施してきた。平成26年度、27年度は指導対象が八王子市・羽村市の一般市民、中学生及び学校職員であったが、平成28年度からはキャンパスが三鷹市に移転したこともあり、三鷹市民にもELS(一次救命処置)指導を実施する機会が増加した。  
連携市である八王子市、三鷹市で開催される駅伝大会においては、AED担当及び救護所

担当として学生と教員が任務にあたり、駅伝競走参加者の安全の確保が図ることができ大会成功の一助となることができた。  
また平成26年11月30日、平成27年10月18日に災害に備えるまちづくりをテーマとした「防災ふれあいフェア」を本学八王子キャンパスにおいて開催した。親子で楽しめるイベントを盛り込んだ訓練内容としたことで、日頃から防災についての意識啓発を行った。



### 生きがいづくりコーディネーター養成講座

平成26年度後期より、履修証明プログラム「生きがいづくりコーディネーター養成講座」を開講した。初年度は本事業のテーマの中の「健康寿命延伸」に焦点を絞り、地域での保健関連活動に対し、大学と地域、団体などとの連携や活動に貢献する市民の育成を目的とし、生活習慣病と健康との関連について理解を深めたり、高齢者の多様な心身の問題について学習したりする講座として開講した。  
平成28年度からは、本事業のテーマである「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」の知識を深め、地域の活動など様々な分野で役立つ知識の修得を目指すとともに、今後のグローバル社会を見据え、

外国籍の方とのコミュニケーションや魅力ある地域やまちづくりのために役立つ知識を修得できるように、講座内容を見直し開講した。  
さらに、平成29年度は、地域の魅力発見・魅力づくりの過程で必要とされる知識や具体的技法、地域で活動を展開するためのプログラム実践能力、健康で活力ある生活を実現するための多様な健康づくりの基礎知識などの学びを組み合わせ、修了生が地域リーダーとして活躍できることを目指して講座を展開した。  
開講当初(平成26年度)の受講生は3名であったが、平成29年度には15名に増加し、受講者の手による地域活動も生まれつつある。



生きがいづくり  
コーディネーター  
養成講座受講者

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
受講者数	3	1	17	15
修了者数	3	1	14	10
開講キャンパス	八王子	八王子	井の頭	井の頭

### 今後の展開に向けて

地域：大学間コーディネーター  
(地域交流推進室 特任講師) | 井上 晶子



大学COC事業「教育の地域志向化」を通して、学生は多くの地域課題を学び、行政・企業、地域組織等との連携により地域の活性化を目指す活動を展開してきた。学生は教職員の指導・支援を得ながら地域の一人ひとりの協働作業を進めることで、大きく成長する機会を得た。  
5年の補助期間終了後も着実に実績を重ねているが、さらなる飛躍に向け、新たな取り組みを模索していかなければなら

ない。例えば、「連携の在り方」の観点からは実践レベルにおける①医学部等4学部を擁する杏林大学の特性を生かした学部間連携・教職員連携、②各大学の個性を生かした大学間連携である。また、「連携の持続性・継続性」の観点からは、①学生の自発的な活動を支援し、②教員のミッションとしての教育・研究活動を拡充に寄与する包括的組織への期待もある。  
現在、COC事業として遠隔地・岩手県との連携が進められている。人口構造、産業形態、地理的状況等が異なる各地や、東日本大震災からの復興途上にある地域との連携事業は、学生や教職員がどのような社会的課題に関わっているか、新たな可能性が拓ける予感がする。

## 主な活動事例

### テーマ「災害に備えるまちづくり」 第32回羽村市駅伝大会における通訳（英語・タガログ語）（平成25年度）

代表教員 | 外国語学部 准教授 八木橋 宏勇

平成26年3月2日（日）に開催された「第32回羽村市駅伝大会」において、コース監察員として大会の運営に協力するとともに、選手・観光客として来ていた日本語非母語話者に対して、英語・タガログ語で通訳案内業務を行った。

災害・急患発生等の不測の事態が生じた場合、日本語非母語話者は情報弱者になる可能性が高く、この取り組み内容はそれを回避する備えとして、イベントの円滑かつ安全な運営への協力として実施した。



### テーマ「生きがい創出」 若者フォーラムの準備活動（平成25年度）

代表教員 | 総合政策学部 准教授 木暮 健太郎

羽村市では、若年層が「街づくり」に関与する機会を提供し、市政への関心を高めることを目的としたプロジェクト「若者フォーラム」を、在住の若者（18歳～39歳）、市職員、総合政策学部の本幕ゼミナールとの連携によって展開し、様々なイベントや企画を行っている。

このフォーラムへの本学の参加者を拡大するとともに、羽村市の産業、観光資源などの現状を把握し、今後の羽村市・杏林大学連携事業に活かしていくことを目的として、市内各所の見学と市職員とのフリーディスカッションからなる「羽村市内見学会」を実施した。



### テーマ「生きがい創出」 子ども虐待防止シンポジウムの開催（平成26年度）

代表教員 | 医学部 教授 橋 昌昌

子ども虐待防止月間の11月に、三鷹ネットワーク大学を会場として、三鷹市を中心とした一般市民対象のシンポジウム「怒鳴らない子育て お母さんと子どもの快適なコミュニケーションを目指して」を開催した。

虐待をさせない親子の良好な関係構築を目指し、コモンセンス・ペアレンティング（CSP）

を基盤とした「怒らない子育て」のスキルの紹介、虐待防止に向けた啓発活動、共助ネットワークの確立を目的とした3つの講演を実施した。参加型のロールプレイも盛り込み、多くの一般市民への啓発と意見交換の機会を得ることができた。



### テーマ「健康寿命延伸」 障がい者スポーツの普及・参加支援（平成27年度）

代表教員 | 保健学部 講師\* 一場 友実

障がい者スポーツでパラリンピックの正式種目である「ボッチャ」について多くの方々に知っていただくべく、パラリンピックに出場経験のある強化選手（Noble Wings所属）が地域住民と本学学生を対象に講習を行った。

地域の方々には、「ボッチャ」についての興味と関心を持っていただくと同時に、障がい者

スポーツに対する理解もある程度は深めていただくことができた。同時に、本学学生にとっては「ボッチャ」競技技術の共有、審判員としての技術・能力の向上を図ることができ、実際のパラリンピックでの国際審判の取得に向けた活動への一助ともなった。



### テーマ「健康寿命延伸」 一市民と専門職で考える参加型ワークショップ 市民と専門職で考える、自分が「がん」になった時の選択肢 ～がん経験者の生き言葉、Maggiesの取り組みに触れる～（平成28年度）

代表教員 | 保健学部 講師\* 柴崎 美紀

多摩地域の地域包括ケアの質の向上と地域志向を持つ学生の育成を目指し、平成25年度より市民と専門職による参加型ワークショップを実施しており、当年度は「がん」をテーマとした。

がん患者の街の中にある居場所として世界規模で普及しているマギーズセンターの日本

における第一人者・鈴木英穂氏の講演会、がん経験者とがん治療中の方のご家族を招いてのセッション、グループワーク等を通して、参加者に「自分ががんになった時にどうするのか？」ということを主体的に考えてもらうことができ、地域の健康寿命延伸の基盤づくりに資する場となった。



### テーマ「生きがい創出」 大学・地域関係機関による地域共生システムの構築 ～子供の居場所作りを通して～（平成29年度）

代表教員 | 医学部 准教授 富田 泰彦

居場所づくりプロジェクト「だんだん・ばあ」では、平成29年5月より平成30年3月までに子ども食堂を22回、地域住民への報告と交流の会を2回実施した。毎回の参加者は70名を超え、22回の延べ参加人数は、子ども1,309人、保護者92人、ボランティア523人であった。活動を通して、子どもたちは「安心して成

長で居場所を、地域関係者には「自身の経験を活かし、想いを込めて社会貢献ができる」居場所を、学生には「子どもたちと大人の間で立つ自主的かつ積極的に地域貢献ができる」居場所を提供でき、世代をこえた生きがい創出に資することができた。



## 連携自治体との協働促進に向けて

### 1. 杏林 CCRC ラウンドテーブル、杏林 CCRC フォーラム（平成 25 ～ 29 年度）

杏林 CCRC ラウンドテーブルは、本事業の特徴的な取り組みであり、本学と連携 3 自治体（三鷹市、八王子市、羽村市）の市長及び企画部門等の実務担当者が一堂に会し、地域課題の現状に意見交換を行うとともに、本事業の具体的な活動や連携体制について協議をするための場とした。

また、杏林 CCRC フォーラムは、杏林 CCRC ラウンドテーブルと同日に開催し（第 2 回を除く）、ラウンドテーブルに参加した行政関係者・地域団体関係者を交え、教育・研究・社会貢献の各分野における本事業の活動実績報告等を行った。

#### 杏林 CCRC ラウンドテーブル

年度	開催日	会場
平成 25 年度	平成 25 年 11 月 2 日（土）	三鷹ネットワーク大学
平成 26 年度	平成 27 年 2 月 21 日（土）	八王子市学園都市センター
平成 27 年度	平成 28 年 2 月 13 日（土）	羽村市生涯学習センター「ゆとろぎ」
平成 28 年度	平成 29 年 2 月 18 日（土）	杏林大学井の頭キャンパス
平成 29 年度	平成 30 年 2 月 10 日（土）	杏林大学井の頭キャンパス



杏林 CCRC ラウンドテーブル

#### 杏林 CCRC フォーラム

年度	開催日	会場	テーマ/内容
平成 25 年度	第 1 回 平成 25 年 11 月 2 日（土）	三鷹ネットワーク大学	「地域社会における大学の未来像 —地域の持続的発展にむけて—」 ・報告「杏林大学の地域交流活動 の現状と今後の展開について」 ・基調講演「高齢化社会における 大学の統合知の役割」杏林 CCRC 研究所の目指すもの
	第 2 回 平成 25 年 11 月 30 日（土）	三鷹ネットワーク大学	「閉じゆくみんまで一地域で子育てを 変え、虐待を防止するために—」 ・講演「子どものことば」及び パネル討論会
平成 26 年度	平成 27 年 2 月 21 日（土）	八王子市学園都市センター	・平成 26 年度の教育・研究・ 社会貢献の実績報告
平成 27 年度	平成 28 年 2 月 13 日（土）	羽村市生涯学習センター 「ゆとろぎ」	・平成 27 年度の教育・研究・ 社会貢献の実績報告
平成 28 年度	平成 29 年 2 月 18 日（土）	杏林大学井の頭キャンパス	・地域と活動を進めてきた 4 つの学生グループの成果発表
平成 29 年度	平成 30 年 2 月 10 日（土）	杏林大学井の頭キャンパス ※FD・SD 研究会との併催 (学生 8 グループ)	・地域志向教育研究活動の報告/ 地域志向教育の実践報告 (学生 8 グループ)



杏林 CCRC フォーラムにおける学生発表

### 2. 「つながる地域と大学 ～羽村が杏林大学のフィールド～」(平成 27 年度)

平成 27 年 9 月 12 日（土）、13 日（日）の 2 日間にわたり、羽村市との共催で、「杏林・羽村コモンズ 2015 つながる地域と大学～羽村が杏林大学のフィールド～」を羽村市生涯学習センターゆとろぎにて開催した。

1 日目は、学生と教員が市内で行った活動についてのプレゼンテーション、杏林大学教員・市民の代表者・市職員によるトークセッション「連携から共生へ」が行われた。

2 日目には、「Takeout Campus」と題した 4 学部による公開講座を実施した。いずれの講座も、受講者が定員を上回る人気となり、大盛況のうちに終了した。



### 3. 「地域連携ワークショップ まちづくりに『新しい風』を」(平成 28 年度)

平成 28 年 5 月 21 日（土）、開設から 1 カ月半が経過した井の頭キャンパスにおいて、「地域連携ワークショップ まちづくりに『新しい風』を」を開催した。地の拠点としての本学の存在を理解してもらおうと同時に、地域との協働による新しいまちづくりに関して共に考える機会にすることを目的としたもので、大学、市民、事業者、行政関係者など約 170 名が参加した。

第 1 部では三鷹市をフィールドにした地域連携活動の発表を、第 2 部では（株）キュムラス・インスティテュート代表取締役 / 東北芸術工科大学コミュニティ・デザイン学科非常勤講師の岩井秀樹氏をファシリテーターに迎え、「高齢者がいきいきと暮らせる協働のまちづくりー健康・生きがい・安全安心ー」をテーマとした協働のまちづくりワークショップを行った。テーマごとにグループとなり、それぞれの課題や解決方法について活発な意見交換が行われた。



#### 4. 杏林 CCRC 研究所 総括シンポジウム（平成29年度 杏林 CCRC 研究所）

平成30年1月13日、三鷹ネットワーク大学との共催で、杏林 CCRC 研究所による5年間の活動を総括する市民公開シンポジウム『都市高齢者の今後：主体的な選択を行うために』を開催した。杏林 CCRC 研究所長の蒲生忍特任教授による講演「死生学という提案」、医学部腫瘍内科学教室の長島丈夫教授による講演「高齢者の医療選択-あなたに癌が見つかった時」に続き、岩手県八幡平市で日本版 CCRC である「オークフィールド八幡平」を営営する山下直基氏をお招きし、「老後の衣食住」と題し「どこでどのように老後を過ごすのか」「日本版 CCRC という概念と課題」「都市居住者の地方移住という選択肢」について講演いただいた。



3つの講演後の総論討論の時間では、日本版 CCRC も含めた地方創生における今後の協働に向けた討議が行なわれ、学生を含めた協力の可能性を具体的に検討することができた。

#### 5. 3市との連携による新たな活動の検討（平成27～29年度）

大学COC事業以前の地域連携活動においては、大学と個々の自治体との取り組みが主であったが、当該事業を通して連携自治体間の協働の可能性が生まれ、地域課題の解決に向けた自治体間連携の萌芽を見出すことができた。

##### 連携3市との協働ワークショップ「長寿社会における災害時の地域づくり」（平成28年度）

第5回杏林 CCRC フォーラムの開催に際し、連携3市との協働ワークショップを開催した。

連携3市の担当者と本学の教員・職員・学生が7名ずつ6つのグループに分かれ、第1部では「長寿社会における災害時の地域づくり」をテーマに、第2部では「優先課題を解決するための促進策と阻害要因」をテーマに、何が課題となっているか、今後に向けた具体的な解決策等について活発な議論が展開された。

具体的には、二次災害への被害軽減や情報伝達などの課題が挙げられ、その対応策として地域コミュニティや近所づきあい、情報共有などを促進する必要性について議論された。



##### 3市連携事業 防災に関するワークショップ（平成29年度）

平成30年3月6日（火）と3月12日（月）の2回にわたり、「3市連携事業 防災に関するワークショップ」を開催した。これは平成27年度の杏林 CCRC ラウンドテーブルおよび杏林 CCRC フォーラムにおいてなされた、「杏林・羽村・八王子・三鷹が連携して3市共通のテーマを持って活動する」との各市長からの提案をもとに生まれた取り組みである。3市共通の課題として『防災』に焦点を絞り、3市行政関係者、履修証明プログラム受講生、本学職員が参加し、避難所運営ゲーム（HUG）や防災ゲーム等のワークショップを行った。その成果と振り返りを、今後各市において展開する事業に活かすこととしている。



#### ごあいさつ



三鷹市長 | 清原 慶子

「地（知）の拠点整備事業」を契機に、未来志向のまちづくりの継続を

5年間にわたる「地（知）の拠点整備事業」は、杏林大学と三鷹市との多分野における協働によって、双方の「知」と「地」の絆が強化され、コミュニティにおける多様な実践が生み出されました。

事業を開始した平成25年度は、長寿社会の課題解決に向けて何をすべきか、何ができるのかについての相互の模索から始まりました。けれども、研究調査の協働を重ねる中で、平成28年度には杏林大学のキャンパスが三鷹市に移転し、杏林大学と地域との連携はますます強まりました。現在では年間40以上の連携事業が実施されています。地域の町会・自治会の主催をはじめとするイベントやボランティア活動での学生の皆様の生き生きとした活躍、サロンや講座などでの大学教員と学び合う市民の姿が、三鷹市では一般的なこととなりました。

「地（知）の拠点整備事業」の期間は終了とはなりますが、これまで培った協働の絆と蓄積された知見を活かして、一緒に、新たな未来をともに切り拓いていきたいと思います。



羽村市長 | 並木 心

「地（知）の拠点整備事業」により培ったノウハウや取組みの継続を

杏林大学と羽村市との連携事業につきましては、学長をはじめとする大学関係者の皆様にご尽力を賜わり、心より感謝申し上げます。

平成25年度から開始した地（知）の拠点整備事業により、杏林大学と羽村市との連携は、これまで以上に深まり、今では幅広い分野で40を超える連携事業に取り組むことができいております。

また、地（知）の拠点整備事業を契機とし、杏林大学と羽村市・八王子市・三鷹市3市による連携事業が新たに実施されるなど、自治体の枠を超えた実行的な取組みへと発展し、その効果が広く地域に還元されているものと実感しております。

こうした貴学との連携した取組みは、大学の知見をまちづくりに幅広く享受できるものであり、地域の課題解決に資する、羽村市にとって大変大きな意義を持つものとなっております。今後も、地（知）の拠点整備事業により培ったノウハウや取組みが継続され、更に充実されますとともに、貴学が「地（知）の拠点」として益々発展されますことを祈念申し上げます。



八王子市長 | 石森 孝志

「地（知）の拠点」がもたらす大学と地域が発展する未来へ

平成25年度から実施された「地（知）の拠点整備事業」を通じて、貴学が八王子市及び三鷹市、羽村市との連携を基に、地域に目を向けた教育・研究・社会貢献を進めてこられたことに、あらためて敬意を表します。

この5年間にわたり、「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」に向け、「杏林 CCRC 構想」に基づく「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」の3つを柱とした取り組みが展開されてきました。地域の課題解決に向けた「地域志向カリキュラム」をはじめ、地域に根ざした大学として貴学の全学的な教育・研究資源を活かした取り組みは、地域再生・活性化に向けた施策の推進に大きな力となりました。

本事業を契機とし、貴学及び3市の連携がさらに深化し、それぞれの地域特性を活かした取り組みが推進されますことを期待するとともに、貴学が「地（知）の拠点」としてこれからも益々発展されますことを祈念申し上げ、感謝の言葉といたします。

# 5年間の成果

## 1. 目標

### 教育

三鷹市・八王子市・羽村市が抱える都市型高齢社会という地域課題に対し、本学が地域の知の拠点となり、地域社会と連携して問題解決を図る取り組みである。地域課題を教育の場に持ち込み、答えのない問題に最善解を割り出すプロセスを体感することで高度な「問題解決力」を身につけた学生を育成することを目指し、短い周期で姿容を繰り返す現代社会を生き抜く力を養成する教育活動を体系的に実施していく。

### 研究

本学が実社会における地域課題を吸い上げ、杏林CCRC研究所が中心となって教育・研究資源を地域課題の解決に向け有機的に投入する取り組みである。全学的に知的資源を結集させ、地域社会と連携することで、個別の研究資源が有機的に結び付き、課題解決に向けた教育・研究活動も活性化することが見込まれ、さらに地域志向の研究活動を拡充していく。

### 社会貢献

「人のために尽くす」という教育理念のもとに実施されてきた膨大な実績をもとに、「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」の3つの観点において、社会貢献をさらに拡充していく。

	平成25年度（採択時）	平成29年度（目標値）	
教育	シラバスにおいて地域に関する学修を行うことを明示している授業科目	55科目	117科目
	シラバスにおいて地域に関する学修を行うことを明示している授業科目の履修学生数（延べ数）	2,566名	6,465名
研究	地域共同研究件数	11件	10件 <sup>※</sup>
	地域との共同研究を行う教員数	13名	23名
	公開講座数及びセミナーの開催数	58講座	175講座
社会貢献	地域向けの公開講座及びセミナーの教員数（実数）	38名	123名
	地域貢献活動の件数	—	20件
	地域の学校教育への支援を行う教員数	20名	30名
	地域の学校教育への支援を行う学生数	120名	180名

※平成26年度から新たに社会貢献の特組みを設けて移行させたため目標値を修正

## 2. 達成状況

### 教育

教育では地域を志向した学習内容を全学部の科目に積極的に盛り込んでいくことを目指し、各学部の知的資源を活用した地域に関する授業展開を促進した。連携する自治体から講師を招く等、地域の現状を学ぶ機会を創出し増加することができた。

	平成25年度	平成29年度
シラバスにおいて地域に関する学修を行うことを明示している授業科目数	55科目	151科目
シラバスにおいて地域に関する学修を行うことを明示している授業科目の履修学生数（延べ数）	2,566名	8,915名

### 研究

杏林CCRC事業の目的を達成するため、その目標として掲げた「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」「持続的発展可能な少子高齢社会像の構築」に該当する地域志向教育研究が積極的に展開された。本事業で取り組んだ「地域志向教育研究費」は地域に関連した共同研究を進める教員への支援策の実績となった。

	平成25年度	平成29年度
地域との共同研究件数（地域志向教育研究）	11件	21件
地域との共同研究を行う教員数	13名	48名

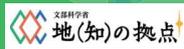
### 社会貢献

本学の特色である医学・保健系の公開講演会を中心に、連携する3市において積極的に地域に向けた講座の開催を行った。社会貢献活動を学生の教育と繋げ、共に活動する教員に対して支援する地域活動助成を実施することで、地域貢献活動の促進がはかられ、学内外への周知に大きく寄与した。

	平成25年度	平成29年度
公開講座数及びセミナーの開催数	58講座	199講座
地域向けの公開講座及びセミナーの教員数（実数）	38名	145名
地域貢献活動の件数	—	23件
地域の学校教育への支援を行う教員数	20名	52名
地域の学校教育への支援を行う学生数	120名	230名

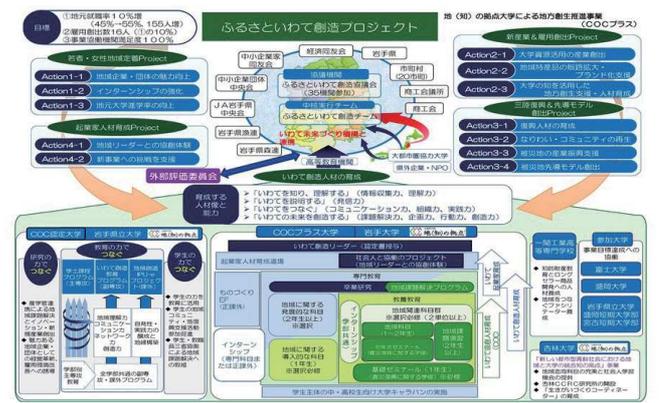


# 大学COC事業の 継続と発展に向けて



「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」は、各大学が地方公共団体や企業等と協働して学生にとって魅力ある就職先の創出をするとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取り組みを支援することを目的とした事業である。平成25年度からの「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」を発展させたものとして、平成27年から開始された。

本学では平成27年度から、「COC+大学(事業責任大学)」である岩手大学がすすめる「ふるさとを創つプロジェクト」事業に「COC+参加校」として取り組み、活動を展開している。



「ふるさとを創つプロジェクト」の概要  
COC+大学である岩手大学と岩手県内6高等教育機関および本学の連携により、「いわてを知り、理解する」「いわてを説明する」「いわてをつなぐ」「いわての未来を創造する」学生(いわて創造人材)を育成し、岩手が培ってきた強固な産学官連携、地域連携をベースに学生の地域定着を加速することを目的としている。地域企業等の魅力度アップや首都圏等の学生も受け入れて実施するインターンシップの強化、三陸復興のための継続的取組と復興教育連携の先導モデル創出などの取り組みを積極的に推進することにより、岩手県内への就職人材の地元定着を図るものである。

## 1. 活動の持続と展開

大学COC事業を通じてさまざまな取り組みを行い、本学ではその数値目標を当初の設定通りに達成した。その結果、多様な地域志向教育・研究・社会貢献活動が展開されることとなり、これまで個々の教員の活動に依拠してきた地域連携の取り組みが「全学的システム」として展開されることとなった。したがって、5年間は全学的な地域志向化に向けたよい契機となったと言える。

この活動を定着・発展させていくことが今後求められるため、学長を中心とする「ポストCOC検討会議」を平成28年度に発足させ、平成29年度に「ポストCOC計画」を立案し、学園の意志決定機関である運営審議会の承認を受けた。具体的な取り組みは以下の通りである。

**① 全体**  
本学の地域志向活動の取り組みを紹介する場として、「杏林COCRCフォーラム」をリニューアルする。これまで行ってきた連携自治体責任者との協議の場である「杏林COCRCラウンドテーブル」をこのフォーラム内に吸収するとともに、地域住民や周辺高等教育機関等の多様なステークホルダーにも公開し、新たな取り組みを生み出す場と位置づける。また、中長期的にはフォーラムにFD・SD研修の役割も付加していく。市民の意見を直接聞く場としてきた「杏林COMONS」や、個別自治体との連携協議会等の窓口も継続する。

その上で、COC+事業への接続も踏まえ、全学的な会議(PDCAサイクルの一環)である「杏林COCRC拠点推進委員会」を継続開催し、全学的なPDCAサイクル体制を維持する。  
なお、新たな取り組みへのサポートとして大学COC事業予算で担保してきた経費部分については、本学予算において「支援事業」として新たに計上することで、教育・研究・社会貢献のスタートアップ支援を担保する。

**② 教育**  
『地域と大学』等の地域志向科目の件数は維持しつつ、中身についてもその発展的定着に向けた検討を各科目担当者で行っていく。またシラバスやウェブサイト等を通じた情報公開も継続する。

**③ 研究**  
杏林COCRC研究所を存置し、これまでの地域志向研究を新体制の中で継続・発展させていく。研究テーマとしては、これまでの「健康寿命延伸」「生きがいの創出」「災害に備えるまちづくり」に加え、COC+事業との接続を踏まえ「東北地方における地方創生」を設定し、積極的に活動を進める。また、ポर्टランド州立大学パブリック研究・実践センターとのMOU締結に伴う「災害に備えるまちづくり」に関する情報交換等、これまでの研究成果を通じた他機関との連携活動を活性化させる。

**④ 社会貢献**  
大学COC事業でこれまで取り組んできた社会貢献活動、特に「重点事業」に関してはこれを継続していく。また、新たなスタートアップも本学予算を活用して展開し、その成果は『地域交流活動報告書』やウェブサイト、『地域交流活動から版』等において継続的に公開していく。  
公開講演会については、学内外の関係機関と協議の上、大学COC事業に伴って活発化した状態を維持する。合わせて、地域住民向けの教育プログラムである「生きがいづくりコーディネーター養成講座(文部科学省「履修証明プログラム」制度)を「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム(文部科学省「職業実践力育成プログラム」に平成28年度認定)に統合し、地域住民の学びの場を発展させる。

本学における全学的な地域志向化は大学COC事業を通じて一定の成果を挙げているが、この事業を通じて構築された地域との「協働関係」を継続・定着・発展させていくことが重要となる。大学COC事業の終了が本学の地域連携活動の終了ではなく、取り組みには時間はかかることが想定されるが、大学と地域が「生きがい」「共存していく」関係の構築に向けて引き続き取り組んでいきたい。

## 2. COC+での本学による連携の取り組み

本学は、大学COC事業での経験と成果を地方創生に展開するため、平成27年度より、岩手大学が中心となる「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+事業）」にも「参加校」として加わっている。

平成27年度より具体的な連携の展開に向けた協議を継続的に実施するとともに、1年次必修科目『地域と大学』に岩手大学長特別補佐・特任教授の小野寺純治氏を招聘して岩手大学のCOC+の取り組みや地方創生への関わりについて学ぶ機会を学生に提供してきた。FD・SD研修会においても岩手の現状と地域課題についてお話しいただき、首都圏大学の本学が果たすべき役割について教員・職員が議論を深めていくための基盤づくりを行った。

また、事業組織のふるさといわて創造協議会内に設置されたふるさといわて創造部会と教育プログラム開発部会等に、担当の教員・職員の積極的な参加を行っている。

### ①岩手県での就職に関する意識付け

本学では、岩手県出身者の学生を継続的に確認し、キャリアサポートセンターによる「LO活セミナー」の開催や「岩手県内事業所見ツアー」の参加促進等を通じて、地元である岩手県への関心を高めることに努めている。また、特に総合政策学部・外国語学部の学生に対して、授業内での岩手県に関する情報提供や「実践型長期インターンシップ」への参加促進等、首都圏大学である本学の学生が岩手県に関わる機会を増やすことに取り組んだ。

### ②岩手県内での教育活動

いわて・杏林交流プロジェクトの一環として本学が「ふるさといわて大交流会」に参加し、首都圏大学であっても地域との関わりを学ぶことを通じて、地元の良さを再認識できることや地域課題に役立つ知識や解決能力を身に付けることができることを発表した。また、平成29年度には、外国語学部の選択科目『フィールドスタディⅣ』を、岩手県釜石市を舞台として展開し、地域創造人材の学びを深める取り組みを本格的にスタートさせた。



MATE実践型インターンシップの紹介



ふるさと発見！大交流会 in MATE 2017



フィールドスタディⅣ（岩手県釜石市）



フィールドスタディⅣ（岩手県釜石市）



## 資料編

[分野] ①生きがい=生きがい創出 ②健康寿命=健康寿命延伸 ③災害=災害に備えるまちづくり ④少子高齢=持続的発展可能な少子高齢社会後の構築

### 地域志向教育研究一覧（平成25年度～平成29年度）

25年度	学部	学科	代表教員	研究・活動テーマ	分野
1	杏林CCRC研究所	—	瀧生 忍	生活習慣病の遺伝的背景に関する研究；高齢者ネットワーク社会でのDTC検査の問題点	少子高齢
26年度	学部	学科	代表教員	研究・活動テーマ	分野
1	杏林CCRC研究所	—	瀧生 忍	三鷹市での医療情報ネットワーク構築に向けた問題点と検討課題の整理	少子高齢
2	医学部	医学科	吉野 秀朗	杏林大学と地域医療の情報ネットワーク構築の基盤技術に関する検討	少子高齢
3	総合政策学部	総合政策学科	遠形 敬夫	三鷹市、八王子市、羽村市におけるソーシャル・キャピタルと災害に関する研究	災害
4	総合政策学部	総合政策学科	岡村 裕	介護サービスにおけるTask-Shiftingの実態と課題に関する研究	健康寿命
5	保健学部	理学療法学科	芝原 美由紀	障がい者スポーツ「ポッチャ」による高齢者の体力づくり	健康寿命
6	保健学部	看護学科	太田 ひろみ	大学生と当事者の連携による発達障がい児の余暇活動支援ネットワーク生成に関する研究 —アクションリサーチを通じた実践研究—	生きがい
7	保健学部	看護学科	大木 幸子	生活保護受給世帯の児童・若者支援における効果的な支援方法の検討	生きがい 健康寿命
8	総合政策学部	総合政策学科	木暮 健太郎	羽村市における若年層を中心とした地域活性化に関する研究	生きがい
9	外国語学部	英語学科	高木 真位子	英語による地域活動情報の動画発信の実態とその教育方法に関する研究	生きがい
27年度	学部	学科	代表教員	研究・活動テーマ	分野
1	医学部	医学科	平野 照之	脳卒中センター診療プロセスの検証と改善が健康寿命に与える効果	健康寿命
2	医学部	医学科	山田 深	リハビリテーション医学・宇宙医学研究成果のアウトリーチ；宇宙飛行士の健康管理をモチーフとした地域における教育プログラムの実施	健康寿命
3	杏林CCRC研究所	—	瀧生 忍	杏林大学と地域の医療情報ネットワーク構築に向けた検討	少子高齢
4	保健学部	看護学科	大木 幸子	生活保護受給世帯の児童・若者支援における効果的な支援方法の検討	健康寿命
5	保健学部	看護学科	太田 ひろみ	大学生と当事者の連携による発達障がい児の余暇活動支援ネットワーク生成に関する研究 —アクションリサーチを通じた実践研究—	生きがい
6	保健学部	理学療法学科	芝原 美由紀	障がい者スポーツ「ポッチャ」による高齢者の体力づくり	健康寿命
7	総合政策学部	総合政策学科	三浦 秀之	東日本大震災以降および復興過程における石巻市のコミュニティ組織の対応から得られる教訓と羽村市など近郊都市への適用	災害
8	総合政策学部	総合政策学科	木暮 健太郎	羽村市における若年層を中心とした地域活性化に関する研究	生きがい
9	保健学部	作業療法学科	長谷川 利夫	精神科病院訪問活動による精神医療のあり方の検討	健康寿命
28年度	学部	学科	代表教員	研究・活動テーマ	分野
1	医学部	医学科	平野 照之	脳卒中センター診療プロセスの検証と改善が健康寿命に与える効果	健康寿命
2	医学部	医学科	山田 深	地域における健康増進プログラムの実施；重力負荷の軽減による商用と運動に焦点をあてたMission X: train like an astronautプログラムの活用	健康寿命
3	医学部	医学科	市村 正一	三鷹市老人クラブにおけるロコモティブシンドローム対策指導者育成	健康寿命
4	地域交流推進室	—	古本 泰之	災害に備えるまちづくり研究 —弱者対応の視点から—	災害
5	杏林CCRC研究所	—	瀧生 忍	超高齢・多死社会における死生学教育ツールの開発	少子高齢

29年度	学 部	学 科	代表教員	研究・活動テーマ	分 野
1	保健学部	理学療法学科	一場 友実	障がい者スポーツフットチャを通じた地域のスポーツボランティアの育成	健康寿命
2	医学部	医学科	飯田原 紀久雄	三鷹市と周辺地域での女性特有骨密度障害を予防する医療環境の構築	健康寿命
3	医学部	医学科	市村 正一	三鷹市老人クラブにおけるロコモティブシンドローム対策指導者育成 —ロコモレ手帳の活用促進と改訂	健康寿命
4	保健学部	看護学科	太田 ひろみ	乳幼児を育てる母親の育児不安は地域のつながりのあり方により軽減するか	生きがい
5	保健学部	理学療法学科	門馬 博	地域・大学・リハビリ専門職の連携による介護予防事業の効果検討	健康寿命
6	地域交流推進室	—	古本 泰之	災害に備えるまちづくり研究 一箭者対応の視点から—	災害
7	吉林CCRC研究所	—	廣生 忍	特許可能な少子超高齢社会の構築:日本版CCRCに関する考察	少子高齢

地域活動助成一覧(平成25年度～平成29年度)

25年度	学 部	学 科	代表教員	研究・活動テーマ	分 野
1	保健学部	理学療法学科	石井 博之	健康づくりプログラム (生涯スポーツの機会提供プログラム)	健康寿命
2	保健学部	理学療法学科	榎本 雪絵	八王子市平岡町わくわく健康教室開催	健康寿命
3	保健学部	救急救命学科	岡部 綱好	救命救急法講習会等防災プログラム ①入居を促す防災施設整備事業 ②第94回全国東八王子市消防訓練大会における応急処置活動等への参加	災害
4	外国語学部	英語学科	八木 健太郎	第52回羽村市駅伝大会における通訳(英語・タガログ語)	災害
5	保健学部	看護学科	①太田 ひろみ ②吉野 純 ③土屋 有利子	子育て支援プログラム ①多胎育児準備教室 ②産後生活再構築支援 ③保護者が幼児に性教育を行うための支援(いのちのお話し会)	生きがい
6	保健学部	臨床検査 技術学科	西村 伸大	八王子市老人クラブ連合会会におけるアロマセラピー	生きがい
7	総合政策学部	総合政策学科	木暮 健太郎	若者フォーラムの準備活動	生きがい

26年度	学 部	学 科	代表教員	研究・活動テーマ	分 野
1	保健学部	看護学科	①太田 ひろみ ②吉野 純 ③土屋 有利子	子育て支援プログラム ①多胎育児準備教室 ②産後生活再構築支援 ③いのちのお話し会	生きがい
2	保健学部	理学療法学科	石井 博之	「生涯スポーツの機会提供」プログラム	健康寿命
3	保健学部	救急救命学科	千田 晋治	ELIS指導等による実践的な災害対応力の向上	災害
4	医学部	医学科	橋 福昌	子ども虐待防止シンポジウムの開催	生きがい
5	保健学部	看護学科	太田 ひろみ	住み慣れた地域で過ごすための 「在宅・あがりこづーかーチーム(仮称)」作り	生きがい
6	総合政策学部	総合政策学科	北島 勉	八王子市におけるエイズ・ピア・エデュケーション	健康寿命
7	保健学部	健康福祉学科	大橋 智子	学校定期健康診断の補助	健康寿命
8	保健学部	理学療法学科	芝原 美由紀	障がい者(児)スポーツの理解向上と参加支援	健康寿命
9	保健学部	理学療法学科	榎本 雪絵	八王子市平岡町健康教室の開催	健康寿命
10	総合政策学部	総合政策学科	三浦 秀之	羽村東口商店会 ヒアリングプロジェクト	生きがい
11	保健学部	作業療法学科	加藤 英世	音楽(吹奏楽)を活かした高齢者・知的障害、 幼児に対する生きがい創出及び発達支援	生きがい
12	保健学部	看護学科	尾澤 恵子	吉林大学・三鷹ネットワーク大学共催/「私の案内書作り」講座	生きがい

27年度	学 部	学 科	代表教員	研究・活動テーマ	分 野
1	保健学部	理学療法学科	榎本 雪絵	「平岡町わくわく健康教室」のフォローアップ	健康寿命
2	保健学部	理学療法学科	一場 友実	障がい者スポーツの普及・参加支援	健康寿命
3	保健学部	救急救命学科	千田 晋治	ELIS指導等による実践的な災害対応力の向上	災害
4	保健学部	看護学科	太田 ひろみ	住み慣れた地域で過ごすための 「在宅・あがりこづーかーチーム(仮称)」作り	生きがい
5	保健学部	看護学科	柴崎 美紀	市民と多職種で地域包括ケア 考える参加型ワークショップ『たまたまLive』の企画と運営	健康寿命
6	保健学部	看護学科	吉野 純	産後生活再構築の育児支援サークル「びあんず」	生きがい
7	保健学部	理学療法学科	石井 博之	「生涯スポーツの機会提供」プログラム	健康寿命
8	保健学部	看護学科	太田 ひろみ	多胎育児支援活動	生きがい
9	保健学部	救急救命学科	千田 晋治	防災ふれあいフェア	災害
10	保健学部	看護学科	尾澤 恵子	吉林大学・三鷹ネットワーク大学共催/「私の案内書作り」講座	生きがい

28年度	学 部	学 科	代表教員	研究・活動テーマ	分 野
1	保健学部	看護学科	吉野 純	産後生活再構築の育児支援サークル「びあんず」	生きがい
2	保健学部	看護学科	柴崎 美紀	市民と専門職で考える、自分が「がん」になった時の選択肢 ～がん経験者の生きる言葉、Maggiesの取り組みに触れる～	健康寿命
3	保健学部	理学療法学科	石井 博之	「生涯スポーツの機会提供」プログラム	健康寿命
4	保健学部	救急救命学科	千田 晋治	ELIS指導による実践的な災害対応力の向上	災害
5	保健学部	看護学科	太田 ひろみ	多胎育児支援活動	生きがい
6	保健学部	理学療法学科	榎本 雪絵	三鷹市における健康教室の開催	健康寿命

29年度	学 部	学 科	代表教員	研究・活動テーマ	分 野
1	保健学部	理学療法学科	相原 圭太	「生涯スポーツの機会提供」プログラム	健康寿命
2	保健学部	看護学科	吉野 純	産後生活再構築の育児支援サークル「びあんず」	生きがい
3	保健学部	救急救命学科	千田 晋治	ELIS指導による実践的な災害対応力の向上	災害
4	保健学部	看護学科	太田 ひろみ	多胎育児支援活動	生きがい
5	保健学部	理学療法学科	榎本 雪絵	八王子市・三鷹市における健康教室の開催	健康寿命
6	医学部	医学科	富田 泰彦	大学・地域関係機関による地域共生システムの構築 ～子供の居場所作りを通して～	生きがい

平成28年度、平成29年度『地域と大学』アンケート経年比較

回答数 | 平成28年度: 1,034名 平成29年度: 1,082名

a | あなたは『地域と大学』の授業にどの程度積極的に参加しましたか?

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
1 非常に積極的に参加した	31.7%	38.2%	31.0%	38.7%	27.3%	34.1%	35.4%	40.2%	40.2%	47.1%
2 まあまあ積極的に参加した	62.0%	57.0%	54.0%	51.4%	67.7%	62.1%	57.2%	53.3%	56.1%	49.3%
3 あまり積極的に参加しなかった	5.5%	4.6%	13.2%	9.9%	4.7%	3.6%	5.1%	5.9%	3.7%	3.6%
4 まったく積極的に参加しなかった	0.5%	0.2%	0.9%	0.0%	0.2%	0.2%	1.7%	0.6%	0.0%	0.0%
9 無回答	0.3%	0.0%	0.9%	0.0%	0.2%	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%

b | あなたは地域（三鷹市・八王子市・羽村市）の現状・課題を理解できましたか？

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
1 とてもよく理解できた	25.5%	34.0%	22.1%	32.4%	23.7%	33.9%	27.4%	39.1%	30.4%	31.2%
2 まあまあ理解できた	69.3%	61.8%	72.6%	59.5%	71.1%	62.5%	67.4%	57.4%	64.5%	64.7%
3 あまり理解できとは言えない	4.4%	3.4%	4.4%	6.3%	4.7%	3.1%	2.9%	3.0%	5.1%	3.2%
4 まったく理解できなかった	0.5%	0.7%	0.0%	1.8%	0.4%	0.5%	1.7%	0.6%	0.0%	0.9%
9 無回答	0.3%	0.0%	0.9%	0.0%	0.2%	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%

c | あなたはbの課題に対する市役所（三鷹市・八王子市・羽村市）の取組を理解できましたか？

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
1 とてもよく理解できた	28.1%	30.8%	29.2%	29.7%	26.7%	31.7%	28.0%	30.2%	31.3%	29.4%
2 まあまあ理解できた	63.1%	62.4%	58.4%	57.7%	65.0%	62.8%	64.6%	62.7%	59.8%	63.3%
3 あまり理解できとは言えない	7.3%	6.1%	11.5%	11.7%	7.0%	5.0%	4.5%	6.5%	7.9%	5.9%
4 まったく理解できなかった	0.8%	0.6%	0.0%	0.9%	0.4%	0.5%	2.3%	0.6%	0.9%	0.9%
9 無回答	0.7%	0.1%	0.9%	0.0%	0.9%	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.5%

d | あなたは自分が暮らしている地域の現状や住んでいる人々に関心を持っていますか？

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
1 とても関心がある	22.1%	22.7%	21.2%	23.4%	22.2%	21.3%	23.4%	29.0%	21.0%	21.3%
2 まあまあ関心がある	55.3%	53.5%	54.9%	53.2%	54.5%	54.6%	53.7%	53.8%	58.9%	50.7%
3 あまり関心があるとは言えない	19.1%	20.2%	19.5%	18.9%	21.4%	21.2%	16.6%	12.4%	15.4%	24.4%
4 まったく関心がない	3.3%	3.5%	3.5%	4.5%	1.9%	2.9%	5.7%	4.7%	4.7%	3.6%
9 無回答	0.2%	0.0%	0.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%

e | あなたは自分が暮らしている地域に貢献できる、自分の力を活かす場所があると思いますか？

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
1 大いにあと思う	20.9%	18.4%	24.8%	19.8%	19.9%	18.6%	22.3%	18.9%	20.1%	16.7%
2 まあまああと思う	51.0%	53.0%	46.0%	48.6%	53.4%	54.4%	48.6%	58.6%	49.5%	47.1%
3 あまりあとは言えない	25.9%	25.7%	26.5%	27.9%	25.2%	25.6%	25.1%	17.2%	28.1%	31.2%
4 まったくあとは思わない	1.8%	2.9%	1.8%	3.6%	1.1%	1.2%	3.4%	5.3%	2.3%	5.0%
9 無回答	0.4%	0.1%	0.9%	0.0%	0.4%	0.2%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%

f | あなたは自分が暮らしている地域に出てフィールド学習をしたいと思いませんか？

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
1 ぜひ積極的にやりたい	15.8%	16.1%	14.2%	18.0%	15.6%	13.9%	17.7%	21.9%	15.4%	16.3%
2 機会があればやりたい	56.1%	56.6%	45.1%	50.5%	58.6%	59.0%	57.2%	53.8%	54.7%	55.2%
3 あまりやりたいとは言えない	21.9%	22.1%	30.1%	18.9%	21.8%	23.2%	15.4%	18.9%	23.4%	23.1%
4 まったくやるうとは思わない	5.7%	5.3%	9.7%	12.6%	3.8%	3.8%	9.1%	5.3%	5.6%	5.4%
9 無回答	0.5%	0.0%	0.9%	0.0%	0.2%	0.0%	0.6%	0.0%	0.9%	0.0%

g | 『地域と大学』の連携の必要性について理解できましたか？

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
1 とてもよく理解できた	32.1%	35.7%	31.9%	27.0%	32.7%	40.4%	32.6%	33.1%	30.4%	29.4%
2 まあまあ理解できた	55.1%	53.0%	50.4%	52.3%	55.3%	50.8%	58.8%	56.2%	54.2%	56.6%
3 あまり理解できとは言えない	10.2%	8.8%	12.4%	11.7%	10.3%	8.3%	4.6%	7.7%	13.1%	9.5%
4 まったく理解できなかった	2.3%	2.6%	4.4%	9.0%	1.5%	0.5%	3.4%	3.0%	2.3%	4.5%
9 無回答	0.3%	0.0%	0.9%	0.0%	0.2%	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%

h | 他学部と合同でグループワークを実施したことについて、どのように思いましたか？

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
1 とてもよい機会であった	49.4%	54.6%	25.7%	30.6%	57.0%	59.9%	44.0%	52.7%	47.7%	55.2%
2 まあまあよい機会であった	43.4%	38.6%	41.6%	46.8%	38.7%	35.6%	50.6%	42.6%	50.0%	39.4%
3 あまりよい機会であったとは言えない	5.1%	5.4%	24.8%	18.0%	3.0%	4.0%	2.9%	3.0%	1.8%	4.5%
4 まったくよい機会ではなかった	1.8%	1.2%	7.1%	4.5%	1.1%	0.5%	1.7%	1.8%	0.5%	0.9%
9 無回答	0.3%	0.0%	0.9%	0.0%	0.2%	0.0%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%

i | 本学と地域創生に関して連携している岩手大学の取組について理解できましたか？

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部		
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	
1 とてもよく理解できた	-	24.4%	-	-	-	-	-	-	27.8%	-	21.7%
2 まあまあ理解できた	-	62.8%	-	-	-	-	-	-	60.4%	-	64.7%
3 あまり理解できとは言えない	-	7.2%	-	-	-	-	-	-	6.5%	-	7.7%
4 まったく理解できなかった	-	1.5%	-	-	-	-	-	-	1.2%	-	1.8%
9 無回答	-	4.1%	-	-	-	-	-	-	4.1%	-	4.1%

j | 『地域と大学』は、学生のみならず各地域課題の解決に参画することで、地域に対する意識を高め、より実践的な知識と問題解決手法を身につけることを目指した科目です。この趣旨を理解していましたか？

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
1 十分に理解していた	27.6%	29.9%	27.4%	31.5%	27.4%	32.9%	28.0%	27.2%	27.6%	23.5%
2 まあまあ理解していた	59.6%	56.4%	62%	52.3%	59.8%	56.3%	58.9%	58.0%	58.4%	57.5%
3 あまり理解していなかった	9.6%	9.5%	9.7%	7.2%	10.7%	8.8%	6.3%	10.1%	9.3%	12.2%
4 まったく理解していなかった	1.7%	1.7%	0.0%	3.6%	1.7%	1.4%	3.4%	0.6%	1.4%	2.3%
9 無回答	1.5%	2.5%	0.9%	5.4%	0.4%	0.7%	3.4%	4.1%	3.3%	4.5%

k | 地域が抱える課題は「答えがない問題」と言えますが、『地域と大学』での学習を通して、問題解決力が身についたと思いませんか？

	全体		医学部		保健学部		総合政策学部		外国語学部	
	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29	H28	H29
1 大いに身についたと思う	17.3%	20.6%	16.8%	16.2%	15.4%	20.3%	19.4%	26.0%	20.6%	19.5%
2 まあまあ身についたと思う	68.3%	66.8%	66.4%	56.8%	71.0%	71.4%	66.3%	56.2%	64.0%	67.9%
3 あまり身についたとは思わない	10.2%	7.6%	15.9%	13.5%	11.3%	6.7%	4.6%	10.7%	8.9%	4.5%
4 まったく身についたと思わない	1.5%	1.5%	0.0%	5.4%	0.8%	0.3%	4.6%	1.8%	1.4%	2.3%
9 無回答	2.7%	3.5%	0.9%	8.1%	1.5%	1.2%	5.1%	5.3%	5.1%	5.9%

### 資料集

地(知)の拠点整備事業成果報告書・地域交流活動報告書

平成29年度 | <http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area/pdf/report29.pdf>

平成28年度 | <http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area/pdf/report28.pdf>

平成27年度 | <http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area/pdf/report27.pdf>

平成26年度 | <http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area/pdf/report26.pdf>

平成25年度 | <http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area/pdf/report25.pdf>

杏林CCRC研究部概要

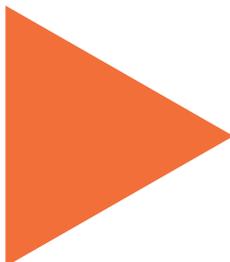
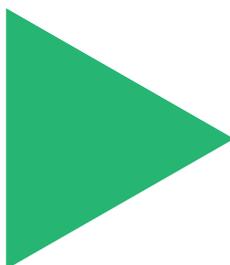
平成29年度 | [http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area2/labo/pdf/h29\\_index.pdf](http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area2/labo/pdf/h29_index.pdf)

平成28年度 | [http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area2/labo/pdf/h28\\_index.pdf](http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area2/labo/pdf/h28_index.pdf)

平成27年度 | [http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area2/labo/pdf/h27\\_index.pdf](http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area2/labo/pdf/h27_index.pdf)

平成26年度 | [http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area2/labo/pdf/h26\\_index.pdf](http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area2/labo/pdf/h26_index.pdf)

地域交流活動かわら版 | <http://www.kyorin-u.ac.jp/unist/society/area2/kawaraban/>



文部科学省「地(知)の拠点整備事業」平成25年度採択  
「新しい都市型高齢社会における地域と大学の統合知の拠点」  
杏林大学COC事業最終報告書

発行日 | 平成31年3月

発行 | 杏林大学 地域交流推進室・地域交流課

〒181-8612 東京都三鷹市下連雀 5-4-1

TEL: 0422-47-8000(代) FAX: 0422-47-8054

<http://www.kyorin-u.ac.jp>

印刷 | (株)文伸

〒181-0012 東京都三鷹市上連雀 1-12-17 三鷹ビジネスパーク